

勇者なら成し遂げてくれるだろう

さなかのさかな

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

処女作です。

ある日、湖のほとりで主人公はある少年と出会う。お互いに抱えるものは重大。それ
ゆえかどこか気の合う二人は親友と呼べる仲間で発展してゆく。

これは、とある転生者と勇者の物語である。

目

次

プロローグ

勇者と感情

戦闘

勇者の旅立ち

44 20 9 1

プロローグ

人気の無い湖のほとりの芝生の上で横になりながらまた空を見上げる。湖から少し離れた場所には俺の住んでいる家があり、自然豊かで鳥の囀りが聞こえる。

のどかで考え方をするのに最適だ。

俺の人生は恐らくありふれたものだつただろう。中学の途中から勉強し始め、そこそこの高校に行き、平均より少し上位の大学へ行き、そして死んだ。面白味の無い人生だ。ここまで分かつたと思うが、俺は転生者だ。転生したらチート能力を貰つて、ハーレムを作つて、楽しい人生を送れるだらうと転生前は思つていた。

だが現実とは残酷で、俺の性格や今まで辿つてきた人生が原因だらうが、あらゆることに対し意欲を失つてしまつた。これがいわゆる燃え尽き症候群なのだらうか。

「あの、すみません」

思考が途切れる。

声がした方に顔を向ければ整つた顔をしている少年がいた。

15～16歳ぐらいだろうか。

どこか優しげな雰囲気を醸し出している少年の髪は太陽の光を反射させる程キラキラと輝いてる金髪で、目の色も同じように金色だ。ようやくか。

「何しているんですか？」

「ただ空を見上げているだけだ。他にやることもないからな。それで、お前は何をしに来たんだ？」

俺がそう言うと少年は困ったように頬をかきながら

「いや、ちょっと、大変な事に巻き込まれまして。僕にしかできない事があるみたいなんです」

俺はその言葉を聞き、ため息が溢れた。まあいい。取り敢えず愚痴でも聞いてやるか

と思ひ

「ここに座れ。まあ、なんだ。ここには、俺らしかいない。お前はストレスとかを一人で抱え込んで将来ハゲそうな性格してそうちだからな。なんか愚痴でも話してみたらどうだ？」

俺がそう言うと少年は少しの沈黙の後、まあハゲたくありませんしね、と苦笑しながら俺に話し始めた。

少年の話を纏めると、少年は田舎の農家の育ちらしい。

村一番の可愛い幼馴染が居て結婚を誓い合つたほど仲良かつた、と嬉しそうな顔をしながら語つた。

だが、だんだん少年の顔が曇つていき、少し声色が暗なつていきながら話し続けた。

少年はこのままこの村で一生を過ごすと思つていたが、ある日豪華な馬車に乗つた第三王女と名乗る者に、あなたの力が必要です、と伝えられ馬車に乗り、はるばる田舎から王都まで来たそうだ。

そこからはよく覚えていないがあつという間だつたらしい。教会に連れてかれ、女神

様に祈りを捧げると急に声が響き、その事を伝えると周りが騒ぎ始め、王様からの謁見を受け、その日は王城で寝泊まりをし、起きて朝一番に城を出てここに来たと話した。

「本当に何でこうなつたんだろうなあ」

そう言う少年の目は少し潤んでいた。

「なあ。愚痴を聞いてやると言つたのは俺だけよ、そこまで話すとお前の正体は馬鹿でも気付くぜ」

少年は、まあそうでしようね、と独り言のように言葉を漏らした後

「お察しの通り僕は、勇者です」

「まあ、だろうな。ちなみに何故俺にここまで話した？　俺がもし魔族で人に擬態していたりしたらお前に危害を加えるかもしけないぞ」

「大丈夫です」

「根拠は？」

「勇者の勘です。それと、そんな事をする人はわざわざ言わないでしよう」

勇者と付くだけで説得力が上がるな、などと下らないことを考えながら

「まあ、そうだな。それで、少しは楽になつたか？」

「はい」

「まあ時間はまだまだあるんだゆつくりしてけ」

それから俺は少年に前世にあるお伽噺や昔話を少し話すと、少年は綺麗な金目を輝かせながら話を聞いていた。

まだまだ子供だな。そう思いながら話し続ける。

少年が楽しいそうに話を聞いていたので時間が過ぎるのを忘れてしまい、気がついたら空が少し赤く染まっていた。

「おい、もうそろそろ暗くなるぞ。城に戻らなくていいのか？」

俺がそう言うと少年は焦ったように身体を起こした

「本當だ。もう城に戻らなきやいけません。……」

そう言う少年は城に行く素振りを見せせず黙っていたので、どうしたのか？　と聞くと決心したように

「あの、またここに來てもいいですか？」

と言うので、くつくづくつ、と笑いを堪えながら

「俺はほん何時でもここにいるからよ、來たくなつたら來てもいいぜ」

ニヤニヤしながら応える俺に少年ムツとした顔をして いた。
だが、それも一瞬のことで少年はすぐに笑顔になり

「ではまた来ますね」

と言い走つていった。

その後ろ姿が見えなくなつた頃

「勇者、ね」

君ならきつと終らせることができるだろう。

忌々しい記憶が蘇る。

自分の夢を語り、俺を散々振り回した女のことを思い出し、チツ、と舌打ちをする。
しかし勇者か。彼は恐らく心が優しく、温かく、そして強いのだろう。

「期待しても良さそうだな」

彼ならきつと。

勇者と感情

「君はそんな戦い方しか出来ないのか？」

彼女はまた呆れたような言い方で俺に問う。いい加減しつこくなつてきたので俺は少し怒ったような口調で

「いいだろ。別に。誰にも迷惑をかけていない。それに、俺はなかなか死なない」

俺の言葉を聞いた彼女は少しムツとした顔で

「いや。少なくともボクに迷惑をかけてるんだよ。君の戦い方を見ていると……なんか、こう、苛つくんだよ」

ほぼ八つ当たりじやねえか。彼女は言葉を続ける。

「取り敢えずその戦い方はボクの前では禁止だよ。分かつたね」

他の戦い方をすると弱くなるのだか。まあ、彼女もそれは分かつてはいるだろう。俺は彼女に一生返せないような恩があるので仕方なく

「分かつた。もしもの時は任せる」

「……ああ。任せたまえ」

少し驚いた後、彼女は嬉しそうにそう言つた。

あれから少年は時々ここに来るようになった。お互い話すことは大体いつも同じで、俺は前世のことを、少年は今自分が何を城でしているかを語り合っていた。

そして勇者がここに来て大体一ヶ月が過ぎた頃に

「あの。ここって結界か何かを張つてありますか?」

俺は少し驚いた。

「ああ。張つてあるが。もう魔力に目覚めたのか？」

「いえ、まだです。そう言つてことは張つてあるんですね。何か勇者になつてからなんとなく分かるんです。魔力とは違つた感覺的なもので」

「それは凄いな」

「まあ、外れることも有るんですけどね」

少年はそう言い苦笑する。

流石にまだ魔力には目覚めないか。勇者がいくら規格外と言つても所詮は人の範囲に過ぎないか。いや、そう決めるのは早計だろう。勇者とは成長していくものだからな。

それにもしても

「なあ、お前最近、筋肉が付いてきたな。ナヨナヨしていた前に比べると、なんつうか、安定してきたな」

その言葉を聞くと少年は、誇らしげな笑みを浮かべ

「分かりますか。二週間前辺りから剣術を習い始めまして。でも、必要な筋力や体力が全然足りないと師匠が言いまして、今は身体を鍛えているところです」

大変そうだな、と俺は思いながら

「どうだ。最近辛くないか？」

と聞くと、少年は真剣な顔で

「確かに最初は辛かつたですよ。でも、最近は皆が僕を必要としてくれて、優しくしてくれるので、今はあまり辛く無いですよ。それに、魔王の所業を女神様から聞いた時、この人達を死なせたくないと思うのと同時に、僕が出来るなら魔王を倒さなきやいけないという気になります」

あまり、か。この様子じや今、ストレスは無いだろうがまた溜まるだろう。その時は俺が相談に乗ればいい。

「いい機会ですよ。村の外に出て、冒険が出来る。それに、僕は皆の期待に応えたい。でも、一番の理由は、魔王が許せない。これは、女神様に言われてやるわけでもない。皆に言われ強制的に成るものでもない。僕が、魔王を倒し、そして本当の『勇者』に成るんだ」

静かに、ただ淡々と自分の決意を語る少年からは、その年齢、顔からでは想像できな
いような凄みが出ていた。

「すみません。少し熱くなつてしましました」

顔を赤くしながら勇者は言う。その姿は先程までとは違ひ恥ずかしそうだった。だが、俺は素直に感心した。

なるほど。これが勇者か。素直で心が強い、そして優しいな。

そう感じた俺は、赤い顔をした勇者に茶化すことなく今思つたことを伝えた。

「お前なら成れるだろう。なんの根拠もないありふれた言葉だ。だが、俺の漠然とした勘ができると言つてはいる。お前は女神様に選ばれたんだ。なら、才能は有るだろう。そしてお前は強い心を持っている。それさえあればなんだつてできるさ」

その言葉を聞くと勇者は嬉しそうな顔をして

「はい！」

と応えた。でも、まあ

「取り敢えず魔力に目覚めような」

俺がそう言うと、少しそんぽりとした表情で

「……はい（・_・）」

と言つた。その表情に俺は笑いながら

「まあ、あんまり焦るな。人には人のペースがある。焦り過ぎるとできることも出来なくなるぞ」

「そうですよね！ 魔力に目覚める時間なんて人それぞれですよね！」

あまりにも食い気味に言つてくるので水を飲みながらその理由を聞いてみると

「城の姫様が毎日俺の部屋に入つてきて言うんですよ。ニヤニヤしながら

あら勇者様。まだ魔力に目覚めてないのですか？ 頑張つて下さい。（裏声）

「ゴホッゴホッ」

なんだその裏声は？ 面白すぎだろ。思わず水が気管に入つてしまつた。その様子を勇者が心配そうに見ている。

「大丈夫ですか？」

「ああ。大丈夫だ。問題ない」

それにもしても、恐らく姫は王の命令か何かで勇者と接触するよういわれているのだろうか？　俺にはどうでもいいことだな。そう結論付ける。

「そろそろ時間ですね」

「そうだな」

時間が早く過ぎてしまつた。

「あの、ここに誰かつれてきてもいいでしようか？」

勇者が不安そうな顔で聞いてきたので、俺は

「大勢でこられると困るが、一人、二人ぐらいならいいぜ」と言う。勇者は安心した顔で、よかつたあ、と呟く。

「じゃあ、また会いに来ますね」

そう言い勇者は去っていく。

駄目だ。勇者はいい奴だ。何の罪もない。

俺の中で隠していた暗い感情が渦を巻く。分かつて いるこれはただの八つ当たりだ。
俺が選択を躊躇い、迷い続けたせいで彼女は死んだのだ。俺が殺したようなものだ。
そう自分に言い聞かせ、暗く、黒い感情に蓋をする。

戦闘

勇者の話を聞き、自分が今、どれくらい動けるのかを確かめてるために久々に結界の外に出てみた。そのまま湖から離れた場所にある俺の住んでいる家に入る。

入つてみるとあまり飾り気のない殺風景なリビングがある。俺自身、ここで本格的に暮らすことはないと思っていたので特に家具などは置いていない。

あまり大きくない家の短い廊下を歩き、自分の部屋に入る。

俺は机の上に置いてある袋に手をつけた。俺らが魔法袋と呼んでいるものだ。簡単に言うと、なんでも入るポケットみたいなものだ。

こんなのがチートじやねえか。そう思う人もいる。だが、これは恐らく世界に二つしか

存在しない。

もし仮に、迷宮で魔法袋が出たりしたら大変なことになるだろう。

大量に魔法袋を手に入れて売りさばき、莫大な利益を得ようとするやつもいれば、少數のみで存在を知らせず独占し、毒などの暗殺武器を隠し持つやつもいるだろう。

これは初見殺しだ。中身が何か相手側に分かつていないので奇策や裏切りなどで簡単に相手を殺せる。

一瞬でこのくらいの考えが出たんだ。時間を掛ければもつと悪用する方法は思い付くだろう。

思考が逸れた。

とはいって、この袋の中に入れている武器は今の俺にはあまり必要ない。そのため、武器を取り出すことはせず、腹を満たすために食料を取り出す。腹が減つては戦ができない、と言う言葉もあるしな。

食事を済ませた後、俺の知っている魔術を30秒位を掛けて発動させ、魔法袋をしまう。そして腰に切れ味のいいナイフを掛ける。

小さなものをひとつ入れる魔術だ。この魔術は覚えていても、財布代わりにしか使えない。魔法袋を持つている俺は別だが。

こういうときは早く行かないと絶対にやらない。そう思つた俺はすぐに靴を履いて家の外に出る。

しまつた。どこで身体を動かすかを考えていなかつた。どうしたものか。俺は石を拾い弄りながら考える。

そんな風に頭を回しながら森の中の道なき道を歩く。長く歩いたせいか、こういうときには転移が使えたなら便利だな。などと無駄なことを思考してしまう。そのせいで気づくべき気配に気付けない。

ヒュ、と近くの地面に矢が刺さる。完全に油断していた。
急いで辺りの気配を探り、敵がいそうな草むらに手に持っている石を投げる。

グギヤ!?

そこか。

石を投げたままの姿勢で走りだし草むらに突っ込むと同時に腰に掛けたナイフで自分の手首を切り裂く

『血液操作 《ブラッドコントロール》』

俺の固有魔法を発動させる。手首から勢いよく出た血を槍の形にし相手の頭を貫く。頭を貫かれた相手はしばらく汚い音を立てながら痙攣している。それを俺は油断せず動かなくなるまで見続ける。

殺した。そう判断し手首の傷を再生させる。

「ゴブリン、か」

死んだ魔物に目をやると、130cm程の緑色の肌をしたゴブリンが頭から血を流している。相変わらず酷い臭いだ。

「たかがゴブリン。去れどゴブリン」

冒険者の間で伝わる言葉だ。

昔はゴブリンと言う魔物はそれ程強くなかったらしい。しかし魔王が現れた影響で全ての魔物が強化され今では侮れない程の敵となっている。

そのため、魔物の討伐はどんなに弱くても中級の冒険者を連れていくのが普通となつてている。

それにもしても油断しすぎだ。ゴブリンが放った矢を見てから存在に気が付くなんて。

暫く戦闘をしていないせいで勘が鈍つたな。

辺りを見渡しゴブリンの足跡を探す。

ゴブリンは基本的に集団で行動しているため、辿つておくとゴブリンの巣を発見できる。

ゴブリンの巣、などと呼ばれているが普通にゴブリンがいるだけの洞窟だ。

今日はゴブリンの巣を潰すことにしよう。俺に不意打ちをした罰だ。後悔するんだな。下らないことを考え、少し口角を上げながら足跡を辿っていく。

気配を察知した後、ガサガサと草を掻き分ける音が聞こえる。俺は音を立てずに近くにある木に登り息を潜める。

グギヤギヤ

グキグギヤグギヤ

二匹のゴブリンは何か話しているようだ。話し続けたまま俺のいる木の下を通り過

ぎる。行つたな。

二匹が去るのを確認した後、静かに木から降り足跡を辿る。

そのまま歩き続けていると洞窟が見えた。入り口には先程見た二匹のゴブリンが立っている。門番の代わりか。手には棍棒を持つている。

さて、どうしよう。このままごり押しで二匹を殺し、洞窟の入り口に火をつけるのもいいがそれだと勘が取り戻せない。スマートに殺していく。

まず、すぐそばの草むらに石を投げおとを立てる。今のうちに手首を切つて血を出しておく。案の定一匹のゴブリンが様子を見に来た。ゴブリンが草むらに顔を出した後、顔を掴み草むらに引きずり込む。手放した棍棒を蹴り飛ばし、パニックを起こしているゴブリンの腹を踏みつける。そのまま、血を剣の形にし喉を突き刺す。

一匹のゴブリンを心配してかちようど二匹目がやって來た。二匹目は、こちらの様子を確認し

グギヤグギヤ！

声を上げながら怒ったように棍棒を掲げながら特攻してくる。怒りに任せて棍棒を振ろうとしているため直線的だ。

ブオン、棍棒が顔の横を通り過ぎていく。棍棒を避けた勢いのまま足を一步踏み出し血の剣をアッパーをする要領で頸を突き刺す。頭のてつぺんまで貫いた後勢いよく引き抜いた。ゴブリンの血が辺りに散らばる。

血の匂いが凄いな。俺は自分の血しか操れないためゴブリンの血に俺の血を紛れ込ませる。

外の異変を察知してか、血の匂いが届いたか、どちらでもよいが10匹ほどゴブリンが出てきた。弓持ちが二匹、後は棍棒持ちか。
少ないな。恐らく洞窟が小さいのだろう。そう結論付け逃げる振りをするとゴブリン
ンが

グギャギャグギャ♪

と追いかけてきた。

そこだ！ 先程紛れ込ませた血を剣の形に変える。先頭を走つて追いかけてきた三匹のゴブリンが剣山に下から貫かれた。

後は正面先頭だ。ゴブリンたちが戸惑つているうちに血の剣を持ち一匹の首をはねる。剣を振るつた勢いで身体を回転させもう一匹も仕留める。

その時、腕に痛みを感じた。

クソツ、矢か。痛みにより硬直した俺の腕をゴブリンが棍棒で叩く。

ゴキツ。俺の腕が折れた音がした。さらに体勢を崩した俺に追い打ちを掛ける

ゴブリンたちが俺に棍棒を振り下ろし続け、身体の様々などころが痛む。

もういいか。彼女無しで戦うには俺は弱すぎる。

『血を操る《ブラッドコントロール》』で誤魔化してきたがもう無理だ。
それに、彼女がいないのでもいいだろう。そう判断する。

ゴブリンたちは戸惑っていた。

洞窟で違和感を感じた外に出てみれば人間が手から血を流しながら立っていた。恐らく戦つたときに傷ついたのだろう。そのそばには同胞の死体がある。こちらは、十匹。人間は一人。殺そう。そう判断し走り出す。

人間がこちらに気付き、逃げたように走つていったので追いかける。すると、地面から何かが出てきて前の同胞三匹が死んだ。

混乱に陥つた後、立て続けに二匹の同胞が流れるように殺された。

ヒュン、という音の後人間の腕に矢が刺さつた。腕の痛みで硬直した人間を同胞が棍棒で殴る。人間はそこから体勢を崩したので一斉に棍棒で殴りつける。10秒ほど人間を殴りつけたので死んだと判断をしそこから離れる。

ここまでだ。ここまでではよかつた。

グギヤギヤギヤ！

後ろで同胞の声が聞こえ振り返つてみると死んだはずの男が同胞の足首を掴んでいる。

そしてボロボロのはずの身体が再生していく。が、完全に再生せず、所々血が流れていた。

足首を掴まれた同胞が鬱陶しそうに、人間に棍棒を振り下ろそうと掲げると頭が爆ぜた。

人間がのつそりと起き上がる。

その目は何も写していないよう無機質で黒く髪は血で赤く染まっていた。

『血縛《ちしばり》』

人間、いや化け物の声が低く響く。

恐怖でその場を離れようとしても身体が縛られていて動かない。

目の前で同胞がゆつくりと殺される。同胞を全員殺した化け物がこちらに近づいてくる。身体が震える。化け物はそんな様子を嗤いながらゆつくりと首に剣を押し当てる。

ブチイリ、と筋肉纖維が切れていく音を聴きながらゴブリンの視界は暗転した。

意識を戦闘から切り替える。ゴブリンを一匹一匹確実に仕留めていったのでもう大丈夫だ。

それにしても、久々にきたな。ここ最近戦闘をしていないせいか制御できなかつた。再生させる箇所に意識を集中させる。

やはり俺は弱い。剣や槍は身体能力に任せて振るうだけだ。得意の死んだ振り作戦が功を奏したが、魔物次第では失敗していただろう。

まあ、今考えても仕方のないことか。思考を切り替え、自分の身体を見てみると、泥や血が服に染み付いていた。

はあ、お気に入りの服が汚れてしまつた。また新しい服を買いにいかないとな。めんどくせえ。

そういえば勇者が誰かを連れてくるようなこと言つてたな。家にある服でいいか。早く風呂に入りてえ。そう思い、家まで走つて帰ることにした。

「君はまた服をボロボロにしたのか。ボクはその戦い方を禁止したはずなのになあ」

彼女はため息を溢す。

いや、さて。俺にも言い分がある。俺は考えていた
言い訳を口にする

「お前の前では戦つていらないだろう」

どやあとした顔で彼女にそう返した。

彼女は自分の髪に触れ少し思考した後、目を細めて

「ふむふむ。君はそんなことを言うんだね。じゃあ洗濯はこれからは君がやることにし

よう

勝ち誇つたかのようになれば女は言う。

それは卑怯だ。だが

「それは無理だ。俺はまだ洗濯の魔術を使えないからな」

「いや、良い練習だ。君がやるようにな」

即答。墓穴を掘つたか。

俺の落ち込んでいる姿を見て彼女はにやにやしている。

いつも通り変わらない日々を過ごす。何も変わらない退屈で心地の良い日々を。

目が覚める。身体を起こしている少しほんやりしている意識を覚醒させる。どうやら風呂に入った後、寝てしまつたようだ。

頬に冷たいものが流れている。ナニかと思つて触れると涙だつた。
ひどく懐かしい夢を見ていた気がする。幸せで温かい夢を。

ダメだ、思い出せない。

思い出せないことを気にして仕方ない。俺は今日あつたことを振り返りながら寝ることにした。

勇者の旅立ち

僕は普通の農民だった。

生まれ育った土地は何もない所だつたが景色が綺麗だといつも思つてゐる。幼馴染みとその家族、村のみんなとの代わり映えのない日常が続く。

田舎の子供にしては可愛い。そう評判だつた彼女は昔、いじめられていた。可愛い子にちよつかいをかけたくなる恋心を知り始めた男の子特有のやつだ。女の子にもあるかも知れぬけど。

それが彼女には嫌だつたようで人気のない所で度々泣いていたそうだ。その姿をまたま見つけた僕は、親に伝えようと訴えかけたが迷惑をかけたくないとそれを承諾しなかつた。

結果から言おう。彼女に対するいじめはなくなつた。

彼女が泣いているのを目撃した日から数日経つた後、僕はいじめている男の子達にちよつかいをかけるのをやめるように伝えた。だが、男の子達は聞く耳を持たなかつた。

それでもしつこく言い続けると、いい加減痺れを切らしたのか彼らは暴力に訴えかけ

てきた。そこからは喧嘩だ。痛かった。まだ身体の強さにそこまで差がない子供同士の喧嘩は数がものをいった。

全身が痛かったが、彼女の泣いている姿を思い出すと負ける気はしなかつた。負けはしなかつたが勝てもしなかつた。僕をしばらくの間殴り続けた彼らは飽きた様子で去つていったのだ。

その日の夜ぼろぼろの格好をした僕を見た大人は事態の全容、というのは大袈裟だがすべてを把握したようでいじめていた男の子達を連れて行つた。その時の顔が泣きそうだつたのを見て、良い気味だと思つていたのは内緒だ。

次の日から彼女は僕についてくるようになつた。僕も彼女の事を拒むようなことはせず、いつも一緒にいた。おかげっこをした。かくれんぼをした。二人でただ散歩をしたりもした。楽しかつた。

そうやつて変化はないが退屈のない日々を送る。これからも続していくんだろうと思ひながら。

そんな日々は呆氣なく終わりを迎える。

いつも通り窓から差す光を顔に浴び目を覚ます。誰もいない静かな朝。固まつた身体を伸ばすために腕を上げて身体を伸ばす。朦朧としていた意識が覚醒したら、近くにある幼馴染みの家で御飯を食べる。家に入りおはようございます、と軽く挨拶をかわ

す。

初めのうちは遠慮をしていたが、押し切られてしまい今では日常の一部と化している。

食後の軽い運動として彼女と村の小麦畑を歩く。風を全身に浴びながら揺れ動く辺り一面の黄金色を見渡す。風の吹く音と小麦同士が擦り合わさる音が共鳴する。

僕はこの景色が好きだ。この時間が好きだ。特に会話もない。それでもお互いのすることを分かつていて。どこか通じあつていてのような時間が。

小さな村なので全員が顔見知りだ。他の人の畑を横切る度におはよう、と声をかけられる。挨拶を返しながら今日も仲良いわねえ、という声も聞こえてくる。声をかけられる度、心が温かくなり、幸福を感じる。そのまましばらく散歩を続け家に帰ろうと歩く。家の前では彼女の両親が大きな声で話している。近くには貴族様が使いそうな馬車があり、立派な毛並みをした馬がたたずんでいる。

珍しいと思いながら何事かと近づいてみると

「これは命令だ。少年は連れていく」

馬車から降りてきたであろう男は淡々とそう告げる。

「何故ですか!? 理由も明かせないような人にシンを連れていかせはしません!」

そう言い激昂するおじさんは俺の存在に気づいたのかハツとする。その視線を辿り俺の方をみた男は近づいてくる。

「君がジーク、と言う名の少年だね」

何故僕の名前を知っているだろうか。警戒心を強める。

「そう固くならないで良い。簡単に言おう。王からの命令で君を連れていく。理由は詳しく言えないが、君にしか出来ないことがある、とだけ伝えておこう」

これを伝えただけでも怒られるけどね、肩をすくめて男は言う。悪い人ではなさそうだ。幼馴染みが手をギュッと握つてくる。

「もし、拒否したらどうなるんですかね?」

「おい！ ジーク！」

僕の興味ありげな言葉におじさんは反応するがそれを無視して男は
「残念だけど拒否権は無いよ。もし断るんだつたら……そうだな、指名手配かな。嫌で
も来てもらうよ」

成る程。こういう時は思考を落ち着かせるべきだ。あくまでも冷静に言葉を間違え
ないよう。理不尽を感じながら自分にそう言い聞かす。

考える。もし、僕が指名手配されたらこの村に様々な人がやつて来るかもしれない。
中には手段を選ばず僕を連れ去ろうとする人さえも。そうなつたら最悪だ。

「分かりました。ですがこの村には何もしないで下さい」

男はその言葉を聞くと微笑みながら

「もちろん。言われるまでもない」

僕の横を一瞥し男は

「彼女達と別れを済ませてきなさい」

と言い残し馬車に戻つていった。

手が強く握られているのが分かる。ああ、勝手に決めてしまつたな。怒られるかな。
そう思いながら振り返る。

「ねえ。本当に行くの？」

「ごめん。ミナ。行きたくはないけど村に迷惑はかけられないよ」

「そう……。帰つてくるよね」

ミナは瞳を潤ませながら僕に問う。きっと不安なのだろう。今まで生きてきた人生の半分以上を一緒に過ごした仲だ。もちろん僕も不安だ。いるべき人、一緒にいた人が急にいなくなるかと思うと。

だが、分からぬ。この国の王様がどんな人物か知らないし、これから何が起こるのかも想像がつかない。

すぐに戻つてくるよ。などとその場任せの言葉を吐くのは良くない。

「正直に言おう。僕にもいつ帰つてくるか分からぬ。数年以上戻つてこないかもしれない。何年僕が必要とされるか予想がつかない」

彼女の頬に涙が流れる。それだけで僕の良心が痛む。

「今から僕は最低なことを言う。さつき伝えた通りいつ帰つてこれるか分からぬ。もしかしたらもう会えないかも知れない。それでも、必ず僕は帰つてくる。だから僕の帰りを待つていて下さい」

頭を下げる。歯を食いしばりいつ殴られてもいいように準備をする。いつまでたつ

でも殴られないでの顔を上げてみると彼女が抱きついてきた。僕は彼女を抱き返す。しばらく包容をかわした後

「待つてる。ジークは優しいから私が悲しむようなことはしないでしよう。だから必ず帰ってきて」

ミナは、はにかむように笑う。その姿が愛おしく僕がまた、抱き締めようとすると

「あの、お二人さん。流石に俺らの前でそういうことやられると見てるこっちがねえ」

「ふふつ。若いつて良いわあ。あんなことしちゃうんだもん」

おじさんは頬をかきながら恥ずかしそうに、おばさんは興奮したように言う。

顔が赤く染まるのが分かる。顔が熱い。ミナの方をチラ見してみると彼女の顔も赤く染まっていた。

「だがよおジーク本当に行つちまうのか？」

「そうよ。ここで二人で暮らすのもありなのよ」

おばさんがにやにやと言っている。

「お母さん！　もういいでしよう！」

ミナとおばさんがじやあつてている。相変わらず仲が良いな。そんな二人を横目に
おじさんは

「俺は正直反対だ。曖昧な理由でお前を行かせたくねえ。だが、ジーク、お前が決めたこ
とだ。これ以上は何も言わない。ただ、娘を泣かすなよ。必ず戻つてこい」

真剣な顔でそう告げる。

当たり前だ。僕は彼女を泣かせたくない。その意思を込めて力強く頷く。その様子
をみた後おじさんはニカツと笑う。

「じゃあ行け。村の皆には俺が伝えておく。だから何も心配せず、すぐに帰つてこい」

「そうね。ジーク君がいないと子供が一人減つちやうんだもの。寂しくなるわ」

「ジーク、必ず帰つてきてね。待つてるから」

それぞれが言葉を掛けてくれる。この家族は本当に温かいな。
特に家から持つしていくものは無いのでそのまま馬車に乗り込む。

「もういいのか？　しばらくは会えないぞ」

「はい。別れは済ましたから。それに必ず戻りますからね。ここに」

僕の言葉を聞いた男は嬉しそうにしながら

「そうか。俺はしばらく馬車の外を警戒しておく。だからお前は一人でここに居ろ」

そう言い馬車から出ていく。

少し経つた後馬車が動き始める。あまり揺れないで、これが貴族様の馬車か、と感動する。

これから王都か。ぼんやりと馬車の外を眺める。

見渡す限り小麦畠。たまに家が見える。目が涙で滲んでいくことが分かる。

この村を見るのは最後になるかもしれない。目に焼きつけるようにその光景を見続ける。

そして静かに祈る。

―――またこの村に戻つてこれますように―――

誰かが微笑んだ気がした。